

「シャロームは最近顔を見せないが元気でやっているのかね？」

退役将軍は溺愛する孫娘のルートをひぎにのせ読み聞かせていた絵本から目を離すと長女のアナットに次女シャロームの様子を聞いた。現役時代はその精悍な面構えとカミソリのような切れ味で恐れられた将軍も孫娘と過ごす今は世間のどこにでもいる好々爺の顔になる。

「病院の仕事が忙しいんじゃないの。あの娘は子供達のベッドを見て回ったり、男の医師に混じって新型ウイルスとか何とか訳のわからない議論をしているのが好きみたいだから。」

アナットは振り返ってそう答えるとまたすぐにパソコンに打ち込んだ父のスケジュール表に目を落とし、今日の来客をどう裁くかという問題に没頭した。父が空将を退役した後も家には来客が絶えず、アポイントメントの調整は彼女に任されていた。彼女がまだ子どもの頃から父の部下が入れ替わり立ち替わり家に訪れていたため彼女の頭の中には彼らの顔はおろか細かい癖までインプットされており、父の秘書としてはうってつけであった。

第4章

第二部 第4章
将軍は退役した今も軍の内部に穩然たる力を持っている。時の首相も彼の意見を求めて時々自宅を訪ねてくるほどである。そのほかにも彼の影響力を期待しているのか、どこことなく胡散臭い人物も家に入入りし密談をしては帰って行く。

彼らが帰った後、將軍は決まって書齋を締め切り家族すら入れずに誰かと電話をしている。アナットは毎月の電話の請求書にワシントンやロンドンなどの国際電話局番があるのを知っている。父親はそのほかにもいろいろな国と交信しているようだ。局番を調べれば相手の国は解るのだが、アナットにとっては父親が国家の重大機密にあらずかっていると言うことだけで十分であり、詮索するつもりは毛頭ない。彼女にとって父親はこの世でただ一人尊敬できる絶対的な存在である。

今の夫も父親が選んだ男だ。彼は父の部下の中でも抜きん出た優秀なパイロットであり、アナットが年ごろの頃から家に出入りしていた。父親が彼を気に入っていたのはパイロットとしての技量や判断力だったことは間違いないが、もう一つは彼が自分と同じアシケナジムだったからでもある。『シヤイ・ロック』は頑ななまでの血統主義者であった。彼はユダヤ人そのものが人類の選ばれた民であることに揺るぎない確信を抱いており、中でもアシケナジムこそ「ユダヤ人の中のユダヤ人」だと信じて疑わなかった。彼にとつてはスペインからやってきたセファルディム達は一段下であり、イスラム圏出身のミズラフィムは二級市民に過ぎない。1990年代にロシアからやってきたユダヤ人と称する新移民などは、血統主義者の彼から見ればこの馬の骨か知れない人種である。『シヤイ・ロック』達の正統派アシケナジムは彼らロシア移民たちを『マフィア』と呼んだ。それは得体の知れない者達に対する蔑称であると同時に、彼らの結束力の堅さはアシケナジム以上のものがあり、そのことに不気味さを覚えたためでもあった。

第4章 第二部

それでも正統派アシケナジムはアラブ人と同じ肌の色のセファルディムよりも

肌の白い『マファイア』達に親近感を覚えるのであった。単純に言えば『シャイ・ロツク』にとつてユダヤ人の優劣はアシケナジムーマファイア（ロシア新移民）—セフェアルデームと言うことになる。ここではパレスチナ人のような純粹のアラブ人など問題外である。彼はアシケナジムの血統を守ることがイスラエルの将来のために絶対に必要だと信じていた。だから彼は自分の目をかけた青年パイロットを早くから娘の結婚相手と見込んでいた。

年頃になったアナットもこの優秀なパイロットに好意を抱いていた。彼女は友人に對して自分は彼に恋をしている、と打ち明けたが、本当のところは打算であり、父親コンプレックスの裏返しであることに彼女自身気付いていなかった。将来を囑望された士官の妻になれば少なくとも軍隊と言う狭い社会の中にいる限り極めて居心地の良い一生を過ごすことができることは現在の父親を見ていればよく解った。努力や勤勉などと言うものに余り重きを置かないアナットにとつて自分の夢を実現する近道は優秀な伴侶を見つけることであつた。

4章
ト』と呼びならわすようになり、娘が年頃になるとそれは結婚と言う自然な帰結となつた。アナットの結婚は友人たちからうらやましがられ、その後、夫が同期の先頭を部切つて出世街道を驀進すると、彼女には羨望の眼差しが向けられた。彼女は夫の出世第二が鼻高々であつた。彼女自身には夫の出世の秘密は自分が父親に働きかけたことにあ

るといふ確信があつた。

父親の有能な秘書として衆目が一致するようになるのと彼女の態度は次第に傲慢になつていった。優秀な秘書となると面会の予約は全て秘書次第である。ボスの部下やボスに面会を求める者は秘書のご機嫌を伺うようになる。自分と父親の一体感に酔つたアナットは高慢な女に変身した。彼女は周囲に集まる全ての男性は自分がコントロールしていると錯覚するようになった。今や夫すらその一人である。男性としての唯一の例外は彼女がこの世で絶対神聖視する父親だけであつた。

勿論賢明な彼女は公の場では夫を支える貞淑で控え目な妻の役割を忘れなかつた。絶対服従の軍隊組織では妻が夫に服従する態度を見せることこそ評価される。そして将校クラブの夫人たちの集まりでは夫の序列がそのまま妻の序列になる。夫の位階が上げれば妻の立場も強くなる。だから夫には何としても出世してもらわなければならぬ。アナットの生きがいは夫を父親と同じ將軍にすることであつた。そしてこの作戦は結婚以来ずっとうまく運んでいた。

(ついこの間までは……………)

彼女の眉間にしわが寄つた。

「また埒も無いことを考えてしまったわ。v

彼女は誰に言うともなくつぶやきながら電子メールの受信画面をスクロールした。あるメールに目をとめた彼女は父親に語りかけた。

「お父様、また例の男からメールが来ているわ。本当にしつこいと言うか何と言うか……」

「例の男って誰だい？」

「ほら、昔シャロームを追っかけ、あの娘と結婚したいって厚かましくもお父様に会いにきた男よ。」

「そうか、あの『ドクター・ジルゴ』のことか。あの時あいつをシャロームから引き離すために米国留学の話をちらつかせたら大喜びで飛びついて確かワシントンの国立衛生研究所に行ったはずだが……」

『ドクター・ジルゴ』という呼び名は父と娘がつけた符牒である。ロシア新移民として農民の両親と一緒にイスラエルに移住してきた彼は街から遠く離れたキブツで共同生活の洗礼を受けた。しかし彼にとってキブツの共同生活は苦痛以外の何物でもなくその生活にどうしても馴染めなかった。彼はキブツを脱出するため医者を目指した。

第4章 医者になった彼はロシアの作家パステルナークの著書に因んで自分のことを『ドクトル・ジバゴ』と自称した。一方、周囲の友人達は偏執狂的で時には二重人格的な言動を弄する彼のことを『ドクター・ジキル』と名付けた。この二つの名前を足して第二で割った結果が『ドクター・ジルゴ』という訳である。

「お父様のおっしゃる通り彼は米国に留学して二年前に帰ってきたわ。ところが彼
ったら何とシャロームと同じ病院に就職したのよ。でも安心して、お父様。友人から
聞いた話では彼はもう妹には興味が無いみたい。二人とも色恋沙汰より自分の研究が
大切みたい。」

『ドクター・ジルゴ』の用件って何だい？」

「うーん。一寸待ってね。」

「彼曰く、ある研究で素晴らしいものを発見したので是非話を聞いてほしい。お父
様を失望させることは絶対ありませんから。彼のメールはこれで何回目かしら。
面会を求めるしつこさはシャロームを追っかけたストーリーカーの頃と変わってないみ
たい。どうします、お父様？」

『シャイ・ロック』はふと彼に会ってみようかと思った。実は少し前、留学帰りの
医学博士があるところでもないものを発見したらしい、と言う話をかつての部下から聞
いていたのである。その『とんでもないもの』がどのようなものかは部下自身も良く
知らなかったようで、雲をつかむような話であった。しかしその話はどこかで彼の第
六感をくすぐるものがあつた。これまで数々の戦闘をくぐり抜けてきた『シャイ・ロ
ック』には動物的カンとでも言うべきものが備わっており、彼は自分のそれに全幅の
第二部 第4章 信頼を置いているのである。

「よし、一度会ってみよう。段取りはお前に任せるよ。」
父の予定表を確かめると、ゴルダは早速『ドクター・ジルゴ』に返事を打ち始めた。